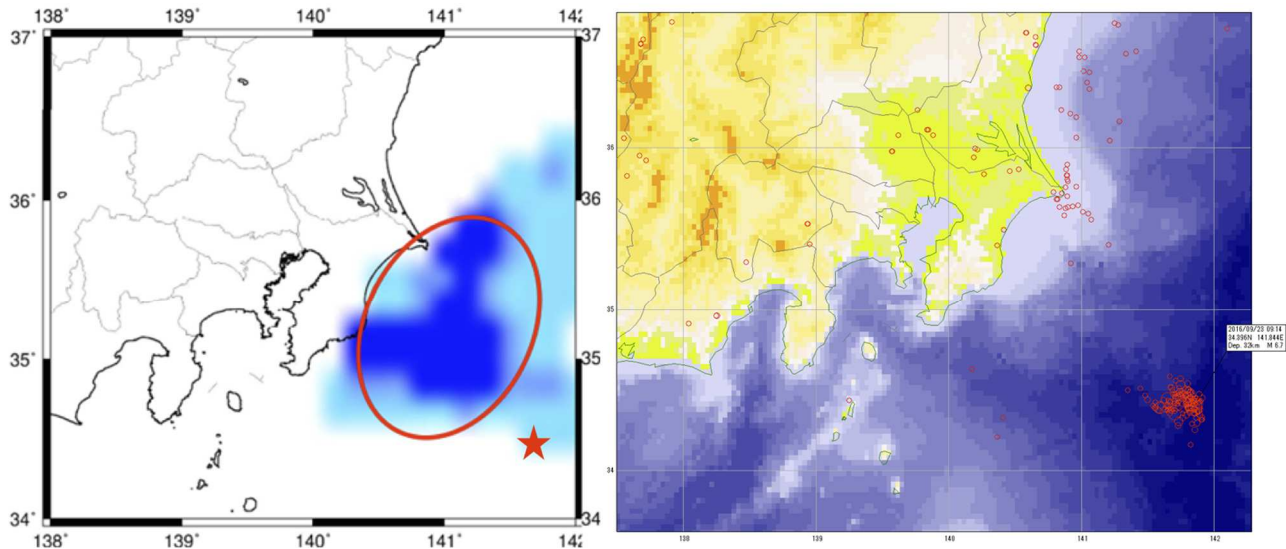


**房総半島南東沖でマグニチュード 6.7 の地震が発生しました**

前回のニュースレターで、房総半島沖での地震活動静穏化の終了により、M6.5以上の地震発生準備が整ったとお伝えしましたが、23日午前9時すぎ、房総半島南東沖でマグニチュード6.7（気象庁の発表では当初M=6.5でしたが、6.7に修正されました）の地震が発生しました。

下の図の左側は、前回のニュースレターの5月10日時点の静穏化領域の図に23日の震源★を重ねたものです。これまで何度も述べていますように、経験則に合致する静穏化領域の端で発生しています。

**9月23日の地震（北緯34.4度、東経141.8度、M=6.7）**

このM=6.7の地震が本震なのか、熊本地震のようにさらに大きな地震の“前震”なのかは重要な問題です。現時点（24日までのデータを用いた解析）では、余震の発生状況から、23日のM=6.7の地震が前震である可能性が残っている事がわかりました。つまり今後さらに大きな地震発生の可能性が残っています。

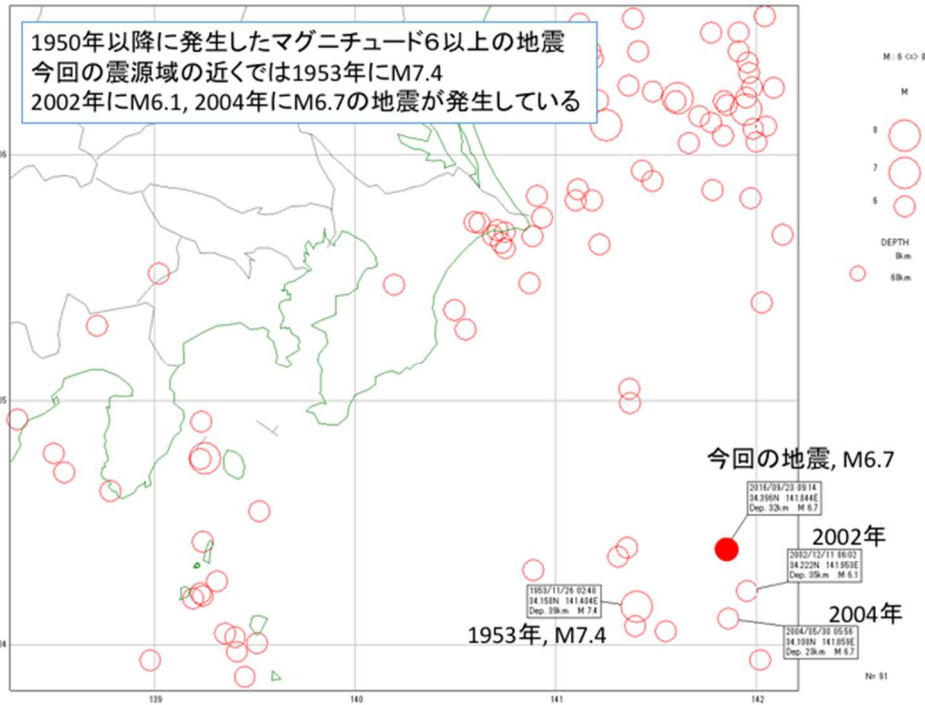
これは熊本地震でも見られた、地震発生後の余震の大きさ分布の解析（b値の解析といいます）から得られる結論です。この地域のこれまでの地震活動より、どうも相対的に大きな地震（余震）が発生しているようです。この房総半島沖では1677年に『延宝房総沖地震』と呼ばれるマグニチュード8クラスと推定される地震が発生しています。この地震は従来から再来が危惧されている地震です。この地震では宮城県沖から房総半島を始め、八丈島までの広範囲で津波による被害が報告されました。

また、房総半島沖では、延宝房総沖地震のようなM8クラスの地震だけでなく、再来間隔が30-40年のM6.5前後の地震が繰り返し発生しています。一番最近は1987年のM6.7というのがあります。この地震は『千葉県東方沖地震』と名付けられました。その前には1950年にM6.3、1912年にM6.2が発生しています。上記3個の発生間隔は、38年および37年でしたが、すでに前回の1987年の地震から30年近くが経過しています。東日本大震災が発生した事で、従来より歪の蓄積速度が大きくなり、**より海岸に近いところで発生すると考えられる房総半島沖の地震**

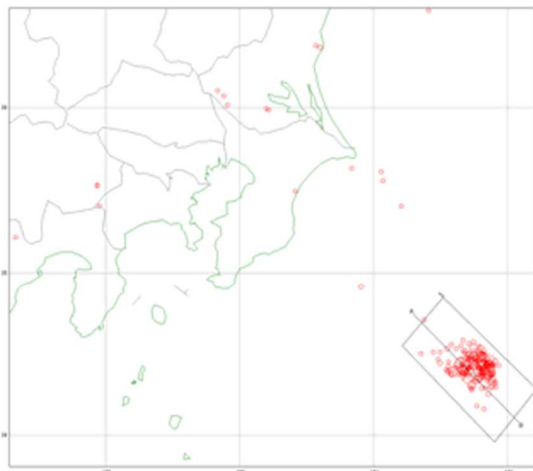


はいつ発生してもおかしくない状況になったと考えています。前回のニュースレターでもわかりますように、地下天気図解析でも静穏化領域は房総半島の海岸近くまで広がっていましたので、房総半島の近くで発生する M6.5 クラスの地震についての危険性は去っていないと考えています。

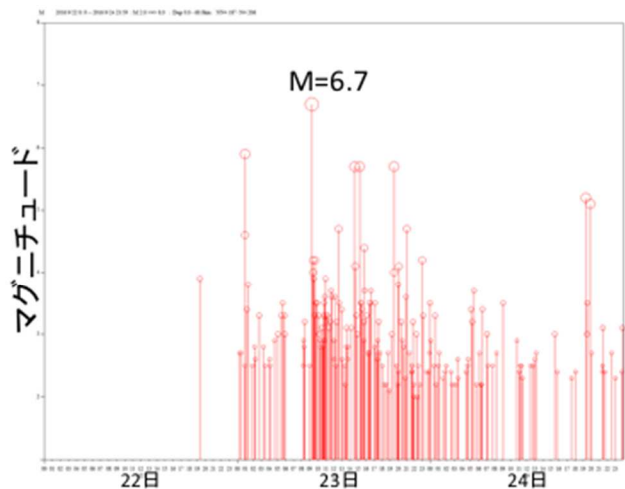
下の図は 1950 年以降に発生したマグニチュード 6 以上の地震を図示しています（深さ 60km まで）。房総半島沖はもっと地震活動が活発でもおかしくない領域なのですが、これまで比較的活動が低調な地域でした。



下の図は左側が今回の地震活動です。もしこの活動が陸域で発生していれば、大きなニュースとなっていました。右側は MT 図と呼ばれる地震活動解析でよく用いられる図です。24 日には M5 クラスも 2 個発生しており、比較的大きな余震が続いている事が、23 日の地震が前震である可能性を排除できない理由です。



9月22日から24日までの3日間に発生したマグニチュード2以上の地震の分布



地震活動のMT図(M:マグニチュード、T:時間) 実際には22日から地震活動が開始していた